

中国における舞踏（BUTOH）の受容

—舞踏家桂勘（1948～）の活動に着目して—

WEN DURILE（お茶の水女子大学大学院）

1. 研究背景と目的

舞踏は、1959年に現代舞踊協会新人公演で発表された、土方巽（1928～1986）の『禁色』を契機として生じた舞踊の一ジャンルである。1980年以降、舞踏家の海外公演が活発になり、舞踏は「BUTOH」の名で認識されてゆく。中国も例外ではなく、日本の舞踏家の中国における活動も盛り上がり、数々の公演やワークショップが行われている。その中で、舞踏家桂勘と彼の弟子である杜景枋（ドウユウファン 1985～）が2014年に設立した「舞踏白狐系」という舞踏カンパニーの活動は中国舞踊界で高評価を得ている。

本研究では、桂勘の活動を事例として、中国における舞踏の現在の受容状況の一端を明らかにするとともに、桂勘の舞踏譜や道具を用いた参加者から動きを導き出す方法を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究の研究方法は、文献資料研究、インタビュー調査および参与観察、質問紙調査である。

使用する文献資料は、中国における舞踏グループの公演やワークショップに関する資料（開催案内、公演評など）である。加えて、研究対象である桂及び杜に対して筆者が行ったインタビュー調査（2022年5月14日、zoom）から得られた言説を資料とする。また、桂の中国人（13名）を対象としたワークショップ（2022年5月～6月全8回、zoom）における参与観察及び質問紙調査を行った。

3. 結果と考察

1.) 桂勘の経歴と舞踏思想

桂勘は、1979年に舞踏結社「白虎社」旗揚げに参加し、1986年に「桂勘&サルタンバンク」を結成し、現在は中国、ラテンアメリカなどを中心に活動している。

桂（2022）は、舞踏観として人間の身体性を根底に据え、「舞踏とは自分の踊りの発見です」と紹介する。また中国での活動については「不可解なものを作ること」を続けていきたいと語る。また別の文脈では彼は、「非日常的なものを見つけること」の重要性を語り「現在、世界各地に舞踏が存在するが、中国が日本の重要なルーツである」と述べ、「現地 [中国] の文化と融合して新しいスタイルの舞踏が生まれていた」（2018）と述べている。

2.) 中国での桂勘の舞踏ワークショップの実践

今回のワークショップでは、情野千里の詩や日常生活でよく使われる道具（モノ）を舞踏譜として用い、参加者は相互に舞踏譜の理解から自分の動きを見つけ、相互に見合うという活動が重ねられた。質問紙調査からは、参加者の舞踏に対する第一印象として面白い(9)、グロテスク(7)、奇妙(6)、怖い(3)（複数回答）が確認された。しかしワークショップの参加後には、舞踏の印象に変化が確認された（表参照）。例えば「舞踏は暗くない。(…)未知の美への探求である。」（参加者A）、「舞踏は自分自身の身体の探求」（参加者D、I）等と答えている。桂のワークショップを通して中国の参加者らは舞踏の表面的な認識から内面の探求や想像力の解放へとその認識を変えることが確認された。

	「参加後の舞踏についてあなたが抱く印象は？」 参加者により記述(部分)
A	舞踏は暗くない、テンプレートはない。舞踏は身体そのものへの 回帰であり、未知のダンス、未知の美への探求である。
B	人とモノの関係を見つめ直す。
D	舞踏は自分の身体の言葉を探求する
E	創造性、努力、観察力
I	舞踏は自分の身体を探求し、慣性を打破し、自分の内面を見る。
J	舞踏は全然おかしくないし、面白いし、楽しいことがわかった。
M	面白い動きがたくさん見つかった。
N	多様性、スタイルは分解して遊べる、それほど深刻ではない。
	(WEN 2022作成)

【主要参考文献】

- ・稲田奈緒美（2001）『土方巽・暗黒舞踏の言説と受容』巻24号 p. 101-102
- ・三上賀代(2015)『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』春風社